教科及び教科の指導法に関する科目（中学校）「英語コミュニケーション演習 C」

English for Teaching Purposes (ETP) について

英語教育講座・池野修

１．授業の概要

「英語コミュニケーション演習 C」は，2 年次以上の学生を対象とした，英語教員免許取得のための選択科目であり，最初 10 回の「教師教育としての英語（English as Teacher Education, ETE)」及び最後 5 回の「英語教授課題遂行能力の育成（English for Teaching Purposes, ETP)」という内容から構成されている。前半の ETP は，英語をコミュニケーションの媒体として，英語で様々な活動を行いながら「部活動の削減」「いじめ問題」などのテーマについて学ぶという内容である。後半の ETP は，英語教師に必要とされる英語力を，英語教授課題（英語教師にとっての real-world tasks）ごとに練習するプログラムである。具体的には，(A) 教師による発表型スモール・トーク（small talk)，(B) 音読・朗読（oral reading)，(C) 文法のオーラル・イントロダクション（oral introduction of the target grammar)，(D) 読解発問の作成（questions making)，(E) 簡単な英語への言い換え（paraphrasing）というモジュールから成っている。

この報告書では，ETP の成果と課題について，受講生へのアンケートの結果にも基づき省察する。なお，この授業の受講生は 24 名であった。

２．授業の評価

2.1. 授業評価方法

学期末に実施した授業アンケートにおいて，受講生に (i) 授業の構成，(ii) 授業で良かった点，(iii) 改善への提案の 3 点に関する質問に自由記述の形で回答してもらった。それぞれの回答結果について以下考察を行うこととする。

2.2. 授業の構成について

本授業では，英語教授課題（ETP の target tasks）ごとに，①練習問題 1→②教師によるデモ 1（参考例 1）→③その活動の留意点の確認→④練習問題 2→⑤教師によるデモ 2（参考例 2）→⑥追加の留意点の確認→⑦パフォーマンス・課題の提出→⑧受講生一人一人のパフォーマンス課題へのフィードバックという構成にした。この展開パターンの特徴や新規性としては，(i) まず活動をやってみて意識が高まった上で教師のデモを見るため，留意点への気づきが多くなること，(ii) 実践→省察（留意点の確認）の後でもう一度練習，さらにはパフォーマンス課題でさらに練習を重ねることで，スキルの向上につながること，(iii) パフォーマンス課題について個別にフィードバックを行うことで学びが大きくなることなどである。

この構成に対して，授業者の意図がうまく理解されたと判断される回答が多く見られた。例えば以下のようなものである。

[1]「最初に①練習問題 1 で，自分なりに取り組んだ後に教師によるデモを聞くという流れが良かった。」

[2]「自分の実力を確かめた後に，教師のデモを参考に確かめることができるためとても効果的な方法であると思う。また，パフォーマンス課題の提出の前に留意点を提示しておくことで，気をつけるべき点がよく分かるためとても助かりました。課題のフィードバックがとても丁寧に書かれていたため，これから自分がどのような点を意識すればよいのか分かり，これからの実践に役立った。」

[3]「実践→反省改良した実践→反省→さらに良いものへという PDCA サイクルに近い形になっていて良いと思う。」

一方で，[4] のような，まず授業者による活動のデモを見たいという回答も 1 名からあった。さらには，[5] のような，さらに練習を追加することの提案もあった。

[4]「①と②の活動を反対にしても良いのかと思った。いきなり練習の活動から始まると，何をしたら良いのか分からず，戸惑ってしまう部分もあった。」

[5]「⑥の追加の留意点の後にもう一度練習があると，その場で留意しながら活動できるかもしれない。」

今のところ，①と②の順番はそのままでと考えているが，練習する前に，その活動の具体的イメージがより湧きやすくなるような工夫は加えたいと考えている。さらに練習を追加することについても，90 分の授業を再構成し，可能かどうか試してみたい。

2.3. 良かった点ついて

多く回答があったのは，一般的な英語力と英語教師に必要とされる英語力の違いについて理解が

深まったというものである。以下の回答が代表的なものであり，ETP の理念が受講生に理解されたことが示されている。

[6]「私自身，教師が使用する英語と普通に話す英語の違いが分かっていなかった。ETP（全 5 回）を通して，その違いについて理解することができた。」

[7]「英語が話せるだけの人がなぜそれではだめなのかしっかりと分かった。」

[8]「英語教師に求められる英語はただ上手で発音がいいだけではなく“生徒に適した英語”が求められることが分かった。」

また，効果的な英語使用についての解説を聞くだけではなく，実際に練習をおこなったことについても，その有用性について多くの受講生が言及していた。例えば，以下 [9] の回答である。

[9]「口頭で「〇〇するのが大切」と説明されるだけで終わるよりも，実際に練習をしてみることによる ETP について体得することができたと思う。」

「英語教師に求められる英語力」を，知識のレベルから技能のレベルに高めるには，単にそれが何かについての説明を受けたり，他の人が行っている英語使用（例えば授業実践動画や模擬授業において）を分析したりするだけでは不十分であり，やはり実際にそれぞれの受講生が練習をすることが必要だと考えている。

具体的な英語教授課題について言及したコメントも見られた。例えば以下のようなものである。

[10]「small talk と oral introduction では，子どもに興味を持たせるための工夫や教師が一方的に話すのではなく，やり取りをしながら行うための具体的な方法について学ぶことができたので良かった。」

[11]「パラフレーズの練習。ふるさと実習に中学校に行った時，自分の英語が上手く生徒に伝わっていないのかもしれないということをすごく感じた。その経験からパラフレーズの能力は英語教師にとってすごく重要な事であるのを感じ，大学でその方法について学びたいと思っていた。」

[12]「パフォーマンス課題。自分で工夫の仕方を考えながら，様々な課題に取り組むことが面白かったです。」

全体として，ETP プログラムは高い評価を得ていることがわかった。

2.4. 改善への提言について

ETP の改善については，あまり回答がなかったが，3 例の回答があったのは，練習量の充実に関してであった。

[13]「練習問題の数を増やす。」

[14]「練習問題で考える時間はもっと長くしてほしい。」

[15]「発音指導はもう少し回数が増えたらいいなと思った。」

量の充実のためには，より多くの時間を確保する必要がある。このために，次の 2 つの案を考えている。まず，今回 5 回の授業で実施した EPT プログラムを 10 回程度に拡大することである。このことにより，今回実施した英語教授課題についてより多くの回数の練習を行うことが可能になり，また，追加の課題（具体的には，活動の手順の指示とデモンストレーション，英語絵本の読み聞かせ，英語による学習指導案の作成など）を扱うこともできる。第 2 の案は，現在授業の最初の 30 分弱で行っている Show & Tell（受講生によるスピーチ活動）をやめて，ETP の練習に充てるという案である。次回の実施までに検討してみるつもりである。

また，次のような提案もあったので，採用できるかどうかを考え，ETP を作り直すことにしたい。

[16]「課題の中で，良い事例を取り上げ，共有していただけるとより参考になった。」

[17]「先生にもらったフィードバックを受けて，さらに改良したものをグループで発表するといった活動を取り入れることを提案する。」

最後に，EPT の価値を認めつつも，それだけではなく一般的な英語力を向上させる必要性を指摘した回答もあった。

[18]「基礎的な英語力の育成を行なった上で，ETP に取り組むと英語力のサイドでは自信が持てるので ETP としての技術の欠如に気付きやすくなり，結果的に質が上がると考えた。問題は基礎的な英語力をどう育むかである。」

ETP をより具体的に理解し，ETP トレーニングがよりうまく機能するためには基礎的英語力の土台が必要であるという，本質をついた指摘であり，この問題をどう解決するのかについても検討をしていきたいと考えている。